京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第十五卷　第二號

大正十一年八月一日發行

論叢

交通稅の捕捉すべき給付能力　法學博士　神戸正雄

支那の古典に見はれたる社會政策　法學博士　田島錦治

經濟道と經濟術　法學士　作田莊一

小作制と小作法　法學博士　河田嗣郎

時論

支那の改造と國際管理　法學博士　末廣重雄

戸數割を論ず　法學博士　小川鄉太郎

物價問題私論　法學博士　山本美越乃

說苑

ジョン・ロックの私有權論　經濟學士　岩城忠一

雜錄

經濟學の革命　法學博士　河上肇

大學生の一年間の學費　經濟學士　藤野靖

大學生の一年間の學費

藤野靖

第一、前言

一體今の大學生の學費は幾ら要るか？こんな質問は隨分各方面の人々から受ける。學校當局者からも、父兄からも、その他世間一般の人々からも、常に聞く質問である。毎月どれ程かの學費を使つてゐながら、斯る事に餘り注意しなかつた私は、此の質問に對して、常に曖昧な返答をして來たが、今度こそ一つ、ハッキリした統計をとつて見やうと決心したのが、昨年の三月。それで四月一日から明細に支出額を記入し

出した。そして本年三月三十一日を以て記入し終つた。それを整理したのが、次の如き表になつた。

第二、本統計の價値

私は此統計を作る決心をすると同時に、友人二三人に相談して、私と同一行動を執つて呉れるやうに頼んだ。皆同意をして、支出を記入し始めたが、何れも一ヶ月ならずして中止して了つた。そして私だけが最後まで記入した。從つて此統計は、何處までも、私一人の學費の統計であつて、大量觀察から得た調査の結果ではない。これが本統計の第一の弱點である。

次に、私一人の學費調査でもいゝ、これが三年間繼續調査の結果ならば未だしも宜かつたのであるが、不幸にして計畫が遲かつたゝめ、僅かに一年間の調査だけしか出來なかつた。これが第二の弱點である。

只私は、極めて平凡な學生らしい學生であつた。贅澤なことは少しもしなかつた、といつて入要の經費を無理に節約もしなかつた。極めて正常的な平凡な學生生活を送つて來た。從つてこの學費統計は前の如き缺點を有してゐるにも拘はらず、先づ普通の學生の一年間の學費の大體をうかゞうには、萬更役に立たぬこともないつまり不完全乍らも、一の標本調査と見られぬ事もあるまいと思つてゐる。

次に、この統計は只一年間だけの調査の結果ではあるが、此の一年間は、宛も大學三年の、最後の一年に位してゐるため、卒業期に在る學生の費用を見ると思へば、多少面白い所もあらう。例へば、卒業の月——三月に於いて、急に經費が膨脹してゐるが如き事を見ることが出來る。

それから、本統計には一錢の脱漏も、ごまかしもない。此點については、極めて正確な材料を提供してゐる事を、ひそかに信じてゐる。

第三、一大學生の一年間學費統計

項目	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	一月	二月	三月	合計	一ヶ月平均	指數
	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円
賄料	一五・〇〇	三二・〇〇	一九・二〇	—	—	一一・四二	三二・〇〇	二〇・〇〇	三・〇〇	一八・〇〇	二五・三	二一・五六	一九九・五〇	一六・六二	二〇・三
日常生活費 部屋代	五・五〇	五・五〇	五・五〇	五・五〇	五・五〇	五・五〇	五・五〇	六・五〇	六・五〇	六・五〇	六・五〇	六・五〇	七・〇〇	五・九二	七・二
電燈代	〇・七〇	〇・七〇	〇・七〇	—	—	〇・七〇	〇・七〇	〇・七〇	〇・七〇	〇・七〇	〇・七〇	〇・七〇	八・八〇	〇・七七	〇・七
炭代	〇・三五	—	—	—	—	—	—	〇・三五	一・八五	一・〇五	二・四六	〇・七〇	六・七六	〇・五六	〇・七
被服附屬品	一・四〇	三・二二	二・二五	—	—	〇・五〇	〇・八〇	二・七七	〇・七七	七・五八	一・四〇	八・四八	三四・三三	二・八一	三・二
洗濯代	〇・三九	二・二二	—	—	〇・七〇	〇・九七	〇・九六	〇・九六	〇・六九	一・九二	一・二二	〇・七九	一〇・八五	〇・九〇	一・一
湯・散髮	〇・八五	〇・八五	一・二七	〇・九一	〇・七〇	〇・八七	一・〇五	二・二五	〇・八五	一・〇〇	〇・八五	〇・六二	一二・一七	一・〇一	一・二
通信費	—	〇・九九	〇・四五	〇・九五	〇・三二	〇・四一	一・二五	一・一四	一・八〇	一・七三	—	〇・六〇	九・七四	〇・八一	一・〇
市內電車賃	—	〇・七八	一・〇四	二・八七	二・〇〇	〇・八七	一・四五	三・九七	一・〇七	二・〇四	—	四・一〇	二〇・三九	一・七〇	二・一
家具雜貨類	一一・四三	五・五三	—	二・二四	〇・三〇	一・〇三	六・四四	二・〇六	一・四五	二・一〇	三・二八	〇・六三	三六・六四	三・〇五	三・七
藥・滋養劑	一・六九	二・五〇	一・二〇	〇・六五	一・五五	六・四五	一・四五	三・五六	二・三五	二・二〇	四・八三	〇・三二	二九・六五	二・四〇	二・一
雜費	—	一・〇九	一・一九	〇・四〇	一・一八	五・一三	〇・〇五	—	〇・〇五	六・一三	一・二六	四・一〇	二〇・九七	一・七五	二・一
小計	三七・三三	四〇・二八	三二・八	一三・五三	二二・八三	三二・九七	四二・七八	五三・六六	四〇・八五	五〇・四五	八六・三二	四九・二〇	四六一・七九	三八・四八	四八・九
授業料其他	二〇・一〇	—	—	—	—	二四・九〇	—	—	—	一五・五〇	—	—	六〇・五〇	五・〇四	六・一
學生ノテシトノ入費 文房具	一〇・三六	〇・五三	〇・四四	〇・三〇	〇・三〇	〇・八五	〇・一五	一・四一	〇・一五	〇・四一	〇・一五	四・一五	一七・一四	一・四二	一・六
書籍新聞	八・〇八	一五・八五	四・二八	八・〇〇	一・四八	一・六五	一七・三六	一五・九六	一七・九六	九・九三	六・七七	二四・一八	一七・六五	一四六・〇四	一二・一七
諸會合費	〇・八五	六・二〇	〇・五〇	—	五・五〇	一・〇〇	九・一五	一・〇〇	一・〇〇	子・〇〇	四・〇〇	—	五五・四〇	四・五七	二・九五
小計	三九・三九	二五・三八	五・三三	八・三三	八・四〇	二六・六六	二三・六六	一八・三七	三七・〇八	三七・六八	二四・三三	三二・〇六	二七五・九八	二二・九五	二二・六
娛樂費 旅行費	七・九四	一一・七七	一八・九七	一〇・四九	五・九三	一二・六八	一四・六一	二一・八四	二一・六四	一一・七	二・七一	一一・五〇	二二五・四七	一八・七四	二二・五
飲食費	七・五〇	二・四三	〇・八七	二・二七	二・四三	二・五〇	五・五四	二・二一	一・八〇	九・〇八	五・九〇	二・五五	四〇・九〇	二・五五	二・四
觀覽料	二・五〇	四・九〇	一・〇〇	二・二二	—	〇・五七	五・五六	二・五一	一・七五	一・八〇	二・五七	二・五七	三五・〇六	二・九七	二・四
玉突其他	三・七〇	七・三四	四・五五	〇・四〇	〇・四〇	〇・九〇	二・四四	三・〇六	〇・六一	〇・二四	〇・二四	〇・二四	二〇・七七	一・〇〇	六・九
小計	二一・七四	二六・四四	七・三四	二六・五六	二六・五六	二一・八五	二二・一五	二七・三一	二七・九九	二六・〇〇	二一・六九	四〇・五一	二九四・三九	二四・五九	二五・一
總計	九八・三六	九六・二〇	六三・三九	二七・六〇	二六・五六	九一・八五	九一・五九	九九・五九	八七・〇六	九一・九一	八五・三三	一二二・八七	九九四・三九	八一・〇三	一〇〇・〇

備考

（い）調査時期

調査開始――大正十年四月一日。

同　終期――大正十一年三月三十一日。

（ろ）調査主體

京都帝國大學經濟學部第三學年學生。

年齡二十五歲――二十六歲。健康。

獨身。京都市吉田の營業下宿屋に寄宿。（本調査開始期より終期に至る間移轉せず）

大正十年四月十六日上洛。同六月二十七日歸省。九月十七日上洛。十二月三十日歸省。十一年一月十日上洛。以後三月三十一日まで京都に在り。

（は）內容項目の說明

本統計に入れたものは、本人の計算に於いて現實に支出した貨幣額に限る。被服（洋服外套和服）の如きは、全部之を父兄より實物給付を仰いだから、茲に記入しなかつた。（茲に記入した被服附屬品とは、下駄靴下カラー等より、下駄靴等の修繕費を含む。）又電車賃、通信費を支出してゐない月もあるが、これは一錢も要しなかつたのではなく、前月の切符や切手の買溜めより、其月には現金を支出するを要しなかつたものである。但し七八月の部屋代は、九月に纏めて拂つたが、これは便宜上各月に分配した。他は總べて支出した現金のみの記載である。

雜費とは、賽錢、寄附金、土產品、宿賃、停車場入場料等。

旅行費中には、歸省費其他の所用のための旅費も含んでゐるが、それ等は僅かなる爲め、總べて之れを娛樂費として旅行費中に一括した。

學生は大抵の場合一人で飲食することはない。多くの場合友人と共である。故に飲食費に、これを其儘交際費と見ても差支へない。つまり此の項目中には、普通の家計表に見る所の交際費、間食費をも含んでゐるわけである。

觀覽料とは、活動、芝居、演說會、展覽會の入場料等。

第四、整理の結果

前表により、第一位を占めてゐるのは、日常生活費で、殊に其中賄料が最高位を占めてゐるのは、まづ普通であらう。旅行費の負擔は多すぎるが、是れだけ位の金額は、他の人にとつては他の種類の娛樂へ廻されやうから、全體の上からは餘り氣にする程ではない。皮肉なのは、文房具代の思ひの外少なきことである。他は極めて平凡である。要するに、各人その費目の割合は異つてゐても、全額に於いては、私の知れる範圍內では、まづ普通の學生は誰れでも大抵似てゐるやうである。即ち一ヶ月八十二圓〇二

錢、一ヶ年の學費九百八十四圓三十九錢、これを假りに三倍して大學三年間の學費とすれば、實に二千九百五十三圓十七錢となる。但しこれは現金支出ばかりで、もし之れに家庭に於ける食料、被服その他の細い實物給與を加へれば、優に五百圓は增さう。

とにかく、一千圓あれば大學を出れると思つたのはもう昔となつて、今では約三千圓餘りを要する。それも現在の儘で停止すればよいが、そんな事はなからう。益々學費が膨脹することは、爲政者、教育者の考へなければならぬ問題である。

第五、附　言

私は屢々、勞働者の家計調査、小學校教師その他の月給取階級の家計表等は、之を見て來たが、未だ學生の學費調査の詳細なるものを見たことがない。かゝる調査の發表されない原因は一つには、自分の生活內容を一般に發表するを好まぬ所より、他の一つの重大な原因は、學生が一般に、斯る煩雜な記帳を好まぬに在る。

併し、學生にさへ、此煩雜な勞を厭はぬ決心があれば、この學費統計な非常に作り易いと思ふ。何となれば、學生は數に於ては極めて多く且つ密集して生活してゐる。大量觀察には、もつてこいである。且つ、最も强味とする所は統計主體の智能の程度が高く、而も揃つてゐることであつて、このことは申告調査には甚だ都合よく、到底勞働者生計調査等には見るべからざる長所と言はねばならぬ。唯一つ困難なのは、學生の學費なるものは、父兄の懷中から出ることは一つであるが、大抵の父兄は實物給付と貨幣給付とを併せ行つてゐて、しかもこの兩者の割合は勿論各人によつて異つてゐることであるから、この範圍を決定することは、困難ではあるが、調査上極めて必要であると思ふ。